12/17 Sun.
第131回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール　14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 131 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

12/18 Mon.
第36回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No. 36 / Festival Hall 19:00

12/21 Thu.
第668回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 668/ Suntory Hall 19:00

12/23 Sat.
第262回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 262 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

12/24 Sun.
第262回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 262 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

※12/15、20公演については、次ページをご覧ください。

指揮
Conductor
ヤン＝ウィレム・デ・フリーント *–p.4*
JAN WILLEM DE VRIEND
※他の出演アーティストは次ページをご参照ください。

ベートーヴェン
BEETHOVEN
交響曲 第9番 ニ短調 作品125 **〈合唱付き〉** [約65分] *–p.10*
Symphony No. 9 in D minor, op. 125 "Choral"
I. Allegro ma non troppo, un poco maestoso
II. Molto vivace
III. Adagio molto e cantabile
IV. Presto – Allegro assai

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。
*No intermission

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場（12/23、12/24）
協賛：非破壊検査株式会社（12/18）、大和ハウス工業株式会社（12/18）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））
独立行政法人日本芸術文化振興会（12/21）
協力：横浜みなとみらいホール（12/17）、コジマ・コンサートマネジメント（12/18）

12/15 Fri.
大成建設 presents 〈第九〉特別演奏会
東京芸術劇場コンサートホール　19時開演
SPECIAL CONCERT, presented by TAISEI / Tokyo Metropolitan Theatre 19:00

12/20 Wed.
SHINRYO presents 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール　19時開演
SPECIAL CONCERT, presented by SHINRYO / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ヤン＝ウィレム・デ・フリーント *–p.4*
JAN WILLEM DE VRIEND

ソプラノ
Soprano
森谷真理 *–p.5*
MARI MORIYA

メゾ・ソプラノ
Mezzo Soprano
山下裕賀 *–p.5*
HIROKA YAMASHITA

テノール
Tenor
アルヴァロ・ザンブラーノ *–p.6*
ALVARO ZAMBRANO

バス
Bass
加藤宏隆 *–p.6*
HIROTAKA KATO

合唱
Chorus
新国立劇場合唱団 *–p.7*
NEW NATIONAL THEATRE CHORUS

合唱指揮
Chorusmaster
三澤洋史 *–p.7*
HIROFUMI MISAWA

コンサートマスター
Concertmaster
長原幸太
KOTA NAGAHARA

【第1部】〈オルガン・ソロ〉
オルガン
Organ
大平健介 *–p.8*
KENSUKE OHIRA

J. S. バッハ
J. S. BACH
主よ人の望みの喜びよ BWV 147/10 [約3分] *–p.13*
Jesu, Joy of Man's Desiring, BWV 147/10

J. S. バッハ
J. S. BACH
トッカータとフーガ ハ長調　BWV 566a [約10分] *–p.13*
Toccata & Fugue in C major, BWV 566a

[休憩]
[Intermission]

【第2部】〈第九〉
ベートーヴェン
BEETHOVEN
交響曲 第9番 ニ短調 作品125 **〈合唱付き〉** [約65分] *–p.10*
Symphony No. 9 in D minor, op. 125 "Choral"
※詳細は前ページをご参照ください。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：大成建設株式会社（12/15）、新菱冷熱工業株式会社（12/20）
事業提携：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場（12/15）

指揮

ヤン＝ウィレム・デ・フリーント

JAN WILLEM DE VRIEND, Conductor

オランダの名匠 デ・フリーントが振る 究極の〈第九〉

©Marcel van den Broek

オランダ響とのベートーヴェンの録音が絶賛された名匠デ・フリーントが読響に初登場。長年の研究と経験に裏打ちされた渾身の〈第九〉を鮮烈に響かせる。

1962年オランダ生まれ。2015年から19年までハーグ・レジデンティ管の首席指揮者を、15年から21年までバルセロナ響の首席客演指揮者を務めるなど、数々の有名楽団で要職を歴任。現在は、ウィーン室内管の首席指揮者とシュトゥットガルト・フィルの首席客演指揮者を務めている。24年には京都市響の首席客演指揮者に就任する。

これまでにロイヤル・コンセルトヘボウ管、フランクフルト放送響、ロッテルダム・フィル、ベルリン・コンツェルトハウス管、チューリヒ・トーンハレ管、ワルシャワ国立フィルなど世界各地の楽団に客演。オペラでは、アムステルダム、バルセロナ、ルツェルンなどでケルビーニ、モーツァルト、ロッシーニ、ヴェルディなど幅広い時代の作品を指揮し、成功を収めている。

1982年には、コンバッティメント・コンソート・アムステルダムを創設し、音楽監督を務めている。17、18世紀の音楽に特化するアンサンブルとしてピリオド奏法をモダン楽器に適用し、J.S.バッハ、モンテヴェルディ、ヘンデルなどの作品を欧米で演奏。実演機会の少ない作品に新たな息を吹き込み、国際的な名声を確立した。

録音も数多く、オランダ響とのベートーヴェン交響曲・協奏曲全集のほか、メンデルスゾーン交響曲全集やシューベルト交響曲全集などをリリースしている。母国ではテレビシリーズや音楽に関する様々な番組に登場し、知名度も高い。

©タクミジュン

ソプラノ

森谷真理

MARI MORIYA, Soprano

圧倒的な表現力と美しく力強い声で世界を魅了する“ディーヴァ”。米マネス音楽院プロフェッショナル・スタディーズ修了後、世界各地のコンクールで優勝、受賞歴多数。欧米ではメトロポリタン歌劇場にて2006年に〈魔笛〉夜の女王で大成功を収めたのをはじめ、シアトル・オペラ、リンツ州立劇場、ウィーン・フォルクスオーパーなど多くの歌劇場で活躍。国内では、日生劇場〈ランメルモールのルチア〉、東京二期会〈サロメ〉〈ルル〉の表題役等を演じ、絶賛を博す。19年には「天皇陛下御即位をお祝いする国民祭典」での国歌独唱で話題を呼び、22年にはドレスデン国立歌劇場に〈蝶々夫人〉表題役でデビューした。小山評定ふるさと大使、とちぎ未来大使。下總皖一音楽賞受賞。名古屋音楽大学准教授、東京芸術大学・洗足学園音楽大学非常勤講師。

メゾ・ソプラノ

山下裕賀

HIROKA YAMASHITA, Mezzo Soprano

伸びやかな美声で頭角を現す新鋭メゾ・ソプラノ。京都府出身。東京芸術大学声楽科卒業後、同大学院修士課程オペラ専攻を首席修了。今年10月には日本音楽コンクールにて優勝、11月には静岡国際オペラコンクールで三浦環特別賞を受賞するなど受賞歴多数。オペラでは、芸大オペラ定期公演〈フィガロの結婚〉ケルビーノ、日生劇場の〈ヘンゼルとグレーテル〉ヘンゼル、〈カプレーティとモンテッキ〉ロメーオ、〈セビリアの理髪師〉ロジーナ、藤沢市民オペラ〈ナブッコ〉フェネーナなどに出演し、好評を博す。コンサートでは、東京都響のヤナーチェク〈グラゴル・ミサ〉、ドヴォルザーク〈スターバト・マーテル〉のほか、ヴェルディ〈レクイエム〉などのソリストを務める。日本声楽アカデミー会員。

テノール

アルヴァロ・ザンブラーノ

ALVARO ZAMBRANO, Tenor

ドイツで活躍の場を広げるチリ出身のテノール。チリ・カトリック大学で学んだ後、ドイツのフライブルク音楽大学で研鑽を積む。2012年から16年まで、ベルリン・ドイツ・オペラの専属歌手を務め、〈魔笛〉タミーノ、〈愛の妙薬〉ネモリーノ、〈ファルスタッフ〉フェントンなどに出演。19年からライプツィヒ歌劇場の専属歌手となり、〈ルル〉公爵、〈ラインの黄金〉フローなどを歌い好評を博す。21年にはシャンゼリゼ劇場でゴンザレス=トロ指揮〈ウリッセの帰還〉でジャルスキーらと共演し絶賛されたほか、近年はトリノ・レージョ劇場〈愛の妙薬〉、チューリヒ・トーンハレ管〈劇場支配人〉(演奏会形式)、ベルゲン国立歌劇場〈イタリアのトルコ人〉に客演するなど、活躍の場を広げている。

深くノーブルな響きで幅広いレパートリーを得意とするバス。東京芸術大学卒業、米ジョンズ・ホプキンス大学ピーボディ音楽院修士課程、インディアナ大学ジェイコブズ音楽院ディプロマ課程修了。フィレンツェでも研鑽を積む。米国ではアスペン音楽祭に2年連続で参加し、〈夏の夜の夢〉シーシアスなどに出演し好評を博した。帰国後は日生劇場〈後宮からの誘拐〉オスミン、東京二期会〈魔弾の射手〉カスパール、〈パルジファル〉グルネマンツ、〈ドン・カルロ〉宗教裁判長などを歌い好評を博す。オペラ以外にも、バッハ・コレギウム・ジャパン声楽メンバーを務めるなど宗教音楽の分野でも活躍しており、ヘンデル〈メサイア〉、モーツァルト〈レクイエム〉、バッハ〈マタイ受難曲〉など出演多数。二期会会員。

バス

加藤宏隆

HIROTAKA KATO, Bass

合唱

新国立劇場合唱団

NEW NATIONAL THEATRE CHORUS, Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。厳正な審査によって選ばれるメンバーは100名を超え、新国立劇場が上演する多様なオペラ公演を通じて、年々レパートリーを増やしている。個々のメンバーが高水準の歌唱力と優れた演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量を誇る。その確かな実力で、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家をはじめ、国内外のメディアからも高い評価を得ている。2007年以来、読響の〈第九〉公演に出演するほか、17年のメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、22年のブラームス〈ドイツ・レクイエム〉、今年10月のアイスラー〈ドイツ交響曲〉などで見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

合唱指揮

三澤洋史

HIROFUMI MISAWA, Chorusmaster

国立音楽大学声楽科卒業。ベルリン芸術大学指揮科を首席で卒業。1999年から2003年までバイロイト音楽祭の合唱指導スタッフを務めた。11年には文化庁新進芸術家海外研修生としてミラノ・スカラ座に3か月駐在。声楽を伴う多くの管弦楽作品に精通し、オペラやオラトリオの指揮なども手掛けている。びわ湖ホール専任指揮者などを経て、01年から新国立劇場合唱指揮者を、19年4月からは首席合唱指揮者を務めている。同合唱団を世界のトップレベルまで引き上げた業績が評価され、16年にはJASRAC音楽文化賞を受賞。合唱指揮以外に、同劇場のこどものためのオペラ劇場〈ジークフリートの冒険〉などの編曲・指揮を務めており、同作品はウィーン国立歌劇場特設会場などで上演され好評を博した。

12/15
12/20
〈第九〉
特別演奏会
【第1部】

Artist

©Verena Ecker

オルガン

大平健介

KENSUKE OHIRA, Organ

横浜市出身。東京芸術大学卒業、同大学院修了。2010年からDAAD給費留学生として渡独。ヴュルツブルクとミュンヘン音楽大学にて教会音楽と現代音楽を学ぶ。13年に国家演奏家資格取得、文化庁新進芸術家海外研修生。16年ニュルンベルク国際コンクールで優勝。同年夏よりドイツを拠点に、欧州各地で演奏会を多数開催。16年から17年にはシュトゥットガルト・ボトナングの福音教会にてカントールを務めたほか、ゾリテュード宮殿礼拝堂におけるコンサートシリーズの音楽監督も兼任。18年から20年までシュトゥットガルトのシュティフツ教会専属オルガニストを務め、教会内での多岐にわたる音楽プロジェクトに携わり高い評価を得た。現在、聖ヶ丘教会首席オルガニスト、アンサンブル室町芸術監督。

ベートーヴェン
交響曲 第９番 ニ短調 作品125〈合唱付き〉

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770〜1827）は生涯に九つの交響曲を書いた。そのすべてが交響曲の歴史における輝かしい金字塔であり、とりわけ最後の交響曲第９番〈合唱付き〉はオーケストラに加えて、独唱、合唱までを要する異例の大作となった。以来、後世の多くの作曲家たちは９番目の交響曲を作曲する際に、ベートーヴェンを意識せざるをえなかったはずである。９という数字は交響曲の創作史におけるマジックナンバーといってもいい。

もっとも、ベートーヴェンの交響曲が９曲に終わったのは、たまたまというほかない。ほんのわずかでも作曲家の運命が違っていれば、交響曲第８番や交響曲第10番が最後の交響曲であってもおかしくはなかっただろう。ベートーヴェンの56年あまりにわたる生涯のなかで、交響曲の創作期間は決して長くはない。交響曲第１番が完成されたのは1800年。交響曲第８番は1812年。この12年間に８曲の交響曲が集中的に書かれている。だが、1812年の第８番から1824年の〈第九〉までにはさらに12年間のブランクがある。〈第九〉は季節外れの交響曲と呼びたくなるほど作曲時期が異なっており、もはや書かれなかったかもしれない交響曲が、最後に奇跡的に絞り出されたかのような印象すら受ける。

交響曲第８番から５年後となる1817年、ベートーヴェンはロンドンのフェルディナント・リースから手紙を受け取る。手紙にはロンドン・フィルハーモニー協会のために新作交響曲を２曲書いて訪英してほしいと記されていた。ベートーヴェンはこれをいったんは受諾する。このプランが実現していれば、ベートーヴェンはロンドンで交響曲第９番と第10番を披露していたことになる。

しかし、この訪英が実現することはなかった。ベートーヴェンは後に自身の健康状態のため取りやめざるをえなかったと説明している。加えて、この時期、ベートーヴェンは甥カールの問題に心を砕かなければならなかった。1815年末にベートーヴェンの弟のカスパル・カールが世を去った際、その遺書には９歳の息子カールの共同後見人としてベートーヴェンと母親ヨハンナが指名されていた。甥カールに対して父親としての責任を負うことを望んだベートーヴェンは、ヨハンナはカールの養育者には不適当であると訴え、４年半にわたる法廷闘争に消耗させられることとなった。1818年にはカールの素行不良による退学処分や、出奔して母親のもとに駆け込むといった事件が起き、独身者ベートーヴェンがよもやの「家庭問題」で翻弄されることになる。当時の日記に心情が綴られている。

「神よ、私が愛しいカールのためによかれと思ってしたことが、他人を苦しませなければならないこの心の痛みをおわかりでしょう。聖なる御身よ、耳を傾けたまえ。すべての生ける者たちのなかでもっとも不幸なこの私に」

1822年、ロンドン・フィルハーモニー協会からふたたびベートーヴェンに交響曲の作曲依頼が届く。今度こそ９番目の交響曲が書かれることになる。1824年に作品が完成されると、ウィーンの人々からベートーヴェンの新作交響曲をウィーンで初演してほしいという嘆願書が作曲家のもとに届けられた。ベートーヴェンはこれに同意し、ケルントナートーア劇場での初演が決まった。初演では、客席から熱狂的な喝采が寄せられた。

第１楽章 アレグロ・マ・ノン・トロッポ、ウン・ポコ・マエストーソ。神秘的なトレモロから主題の断片が垣間見え、やがて頂点で全貌をあらわす。あたかも混沌から秩序が生まれるかのような劇的な幕開け。

第２楽章 モルト・ヴィヴァーチェ。激しく煽り立てるようなスケルツォの間にひなびたトリオがはさまれる。ティンパニの活躍が印象的。

第３楽章 アダージョ・モルト・エ・カンタービレ。天上の音楽を思わせる長大な緩徐楽章。平安と瞑想はやがて金管楽器の強奏による突然の呼びかけで遮られる。

第４楽章 プレスト〜アレグロ・アッサイ。轟音とともに開始され、先の三つの楽章が回想された後、「歓喜の歌」の主題があらわれる。バス独唱に誘われて、合唱がシラーの詩による「歓喜に寄す」を高らかに歌う。トルコ風行進曲、トロンボーンを伴った荘重な教会音楽風の合唱、二重フーガなど、次々と多様なスタイルを巡りながら、爆発的な終結部へと向かう。 〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1818年頃〜24年／初演：1824年５月７日、ウィーン、ケルントナートーア劇場／演奏時間：約65分
楽器編成／フルート２、ピッコロ、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、コントラファゴット、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部、独唱（ソプラノ、アルト、テノール、バス）、合唱

第4楽章

An die Freude
「喜びに」

訳：金子哲理

O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern laßt uns angenehmere anstimmen,　und freudenvollere!
おお　友よ　この調べではない！
さらに心地よく　喜びにあふれる歌を　ともに歌おう！

Freude, schöner Götterfunken,　Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,　Himmlische, dein Heiligtum!
喜び！　神の閃光（ひかり）　天国の乙女たち！
私たちは　炎に酔いしれて　天国の汝の聖地に　歩を進める！

Deine Zauber binden wieder,　Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,　Wo dein sanfter Flügel weilt.
時の流れに激しく引き裂かれた者も　神の不思議な力によって　再び結びつき
神の柔らかな翼のある場所で　すべての人々は　同胞（はらから）となる

Wem der große Wurf gelungen,　Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,　Mische seinen Jubel ein!
ひとりの心の友を持つ　心優しい妻を得る
こうした幸福を得た者は　喜びに唱和せよ！

Ja, wer auch nur eine Seele　Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle　Weinend sich aus diesem Bund!
そうだ、この地上にひとりでも　魂の友を持つ者も　ともに歌おう
そして、それが叶わぬ者は　涙とともにこの輪から離れよ

Freude trinken alle Wesen　An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen　Folgen ihrer Rosenspur.
すべての被造物は　自然の乳房から喜びを飲み
善人も　悪人も　みな　創造主の薔薇の小路をたどる

Küsse gab sie uns und Reben,　Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,　Und der Cherub steht vor Gott.
神は　接吻（くちづけ）と　葡萄酒と　そして　死の試練をくぐった友を　与え給うた
虫にさえも神は快楽を与えた　そして天使ケルビムは　神の前に立つ

Froh, wie seine Sonnen fliegen　Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,　Freudig wie ein Held zum Siegen.
喜びよ　太陽が広い空を　神の定めに従って駆けるように
同胞よ！　自らの道を喜びをもって進め！　英雄が勝利に向かって　走るように！

Seid umschlungen Millionen!　Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder! überm Sternenzelt　Muß ein lieber Vater wohnen.
抱（いだ）き合おう！　幾百万の人々よ！　この接吻を全世界に！
同胞よ！　星々の彼方に　父なる神は住み給う！

Ihr stürzt nieder, Millionen?　Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn überm Sternenzelt!　Über Sternen muß er wohnen.
幾百万よ　ひれ伏したか？　人々よ　創造主を感じるか？
星々の天幕に　神を求めよ！　星々の彼方に　神は住み給う！

J. S. バッハ
主よ人の望みの喜びよ BWV 147/10

ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685〜1750）は1723年、聖母訪問の祝日のために教会カンタータ〈心と口と行いと生活で〉を作曲した。このカンタータでとりわけ知られるのが第6曲および終曲の第10曲に登場するコラール合唱である。この曲はイギリスの名ピアニスト、マイラ・ヘスが1926年にピアノ独奏用に編曲したことをきっかけに、〈主よ人の望みの喜びよ〉の題で広く親しまれるようになった。オルガンをはじめ、さまざまな楽器のために編曲されている。

J. S. バッハ
トッカータとフーガ ハ長調 BWV 566a

バッハの「トッカータとフーガ」といえばニ短調の曲があまりに有名だが、こちらはハ長調の作品。1705年から06年にかけてリューベックのブクステフーデのもとに旅し、北ドイツ楽派の様式を学んだ後の作品とされる。曲は4つの部分から構成される。まず雄大で華麗なトッカータ（プレリュードとも呼ばれる）で開始され、同音反復が特徴的な主題によるフーガが続き、流麗なトッカータを経て、付点リズムで呼びかけるような主題による荘厳なフーガで曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

【主よ人の望みの喜びよ】作曲：1723年／初演：1723年、ライプツィヒ／演奏時間：約3分
【トッカータとフーガ】作曲：1706年頃／初演：不明／演奏時間：約10分